



Title	中世説話物語文芸の形成と展開
Author(s)	近本, 謙介
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39707
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	近本謙介
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第12304号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	中世説話物語文芸の形成と展開
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹 (副査) 教授 後藤 昭雄 助教授 荒木 浩

論文内容の要旨

本論文は、「説話とはなにか」をたえず問題とし、「説話が文学にいかに作用し機能しているか」の問い合わせを自らに課し、説話の生成、改変、影響等に注目しながら、中世の物語、注釈書、謡曲、談義書にいたる、各種のジャンルの作品を対象として考察していった内容である。今日の説話研究は、かつての説話文学とされた作品に限定することなく、周辺の中世文芸への領域にも積極的に参入するようになった。説話の場が重要視され、唱導、注釈にともなう作品形成への広がりに関心が持たれるようになった結果といえよう。すでに明らかにされている、『伊勢物語』の古注が謡曲の数々の作品を生み、『日本書紀』の注釈が中世文学に大きな影響を与えていた事実によっても、説話の言説、場、周縁といった視点が、今日の説話研究に不可欠であるといっても過言ではない。申請者は、そのような現代における先端の研究状況を担う一人として、このたび説話文学の形成をはじめ、物語文芸との交流、影響、展開などにつき、さまざまな資料を駆使して考察するに至ったのである。

本論は400字詰め原稿用紙にして約590枚の、六章、十七節からなる一冊と、新出資料翻刻篇の一冊とからなり、すべて書き下ろしである。

第一章「鎌倉期説話物語形成の諸相」では、まず『続古事談』の漢朝篇説話を取り上げ、卷六第182話の伯夷・叔齊の故事は『史記』に依拠したのではなく、出典は奈良時代に日本に伝來した『珊瑚集』であることを明らかにする。同じ説話を引く『江談抄』『和漢朗詠集永済注』『唐鏡』なども、『珊瑚集』からの引用であり、その広範囲に受容された実態とともに、『続古事談』に吸収された位置づけについても言及する。『十訓抄』には、『和漢朗詠集』収載詩句にまつわる説話が収められており、それと『和漢朗詠集永済注』とのかかわりはすでに指摘されているが、さらに詳細な比較によって、実は複数の資料に依拠しており、永済注はその一つであるとする。『古今著聞集』は、『十訓抄』を取り込んだため永済注の影響が見られるものの、共通関係にない説話は、類聚本系『江談抄』に近く、永済注だけですべてを律することはできないという。『松浦宮物語』の登場人物の造型や物語の道具立ての複雑さは、『無名草子』に記される同時代物語と共通するプロットのあることを確認したうえで、「長谷と玉による転生」「鏡の物語」「住吉の加護」など、説話とのかかわりについて論じていく。弁少将が華陽公主から授かる、長谷寺での再会と転生を果たす役割を持つ「水晶の玉」は、『法華經』五百弟子授記品の「衣珠」が背景にあり、『長谷寺驗記』の宝珠のモチーフは、『阿沙縛抄』『覚禪抄』の如意宝珠が変じて吉祥天女になる説と類似する。以下、形見の鏡と中国の故事、住吉の加護と『住吉大社神代記』、『江談抄』における吉備大臣が弁少将のモデルであったとする論にも及ぶ。

第二章「草子・絵巻の形成と展開」は、『咸陽宮』と『不老不死』の奈良絵本を対象とし、背景となる説話の物語化、中世における伝承の流布等について考察する。『平家物語』の咸陽宮譚は、『史記』や『燕太子伝』を源泉しながら、燕太子丹と秦始皇帝との物語を綴る朗詠注の影響下に形成されているが、それをさらに展開したのが『咸陽宮絵巻』である。今日伝本は六本知られており、『平家物語』を継承してさらに報恩譚としての性格を強調する大阪青山短期大学本、謡曲『咸陽宮』の詞章を取り込む専修寺本、『太平記』の眉間尺の剣譚を語る穗久邇文庫本など、物語化の方法は一様でなく、それぞれ独立した作品として考察していく視点を主張する。『不老不死』は、『奈女薈婆經』の展開にそいながら、室町末から江戸初期にかけての、『神農本草經』などに出典を求める事のできる、医学用語を増補しての物語化である。この枠組みは、浄土宗談義本や天台宗法華直談の薈婆伝とも共通する世界を持つ。中世には薈婆を物語化する例は見られないが、三国の物語を語っていく方法は『法華經鷲林拾葉鈔』の構造と重なり、さらにそこから派生した『三国伝記』が『不老不死』の先駆をなしていると考えられる。

第三章「古今注と説話」は、新出資料である三手文庫蔵『古今秘抄』の書誌や成立、伝来とともに、中世文学とかかわる問題点、資料そのものの持つ意義について述べる。これと異本関係にあるのがカリフォルニア大学バークレ校本（三井文庫旧蔵本）『古今秘伝抄』で、両本は互いに不備を補いながらも、本文としては三手文庫本が優位にあるとする。なお、この両本を校合し、古今集歌との対応一覧を示した資料篇が別冊として付される。『古今秘抄』の本説が、室町期の学問や教養を示す、古今注、日本紀、神道書、歌学等と接点のある様相を探っていく。末流の注釈書ながら、豊富な本説は、『毘沙門堂本古今集注』や『古今和歌集序聞書三流抄』などの系譜にあり、古今注の形式を借りた中世の一種の教養書として読むことの可能性を提唱する。『古今秘抄』の「よぶこ鳥」の本説は独自の説であり、類似した説話としては説経『かるかや』に見いだす。鳥類の親子恩愛の姿を物語の展開に用いた作品としては『三嶋之大明神之事』があり、お伽草子の『みしま』にも引かれるなど、中世文芸への底流での広がりが指摘できる。『住吉縁起』（慶應大学図書館蔵）では、「岸の姫松」が「わすれ草」であるとするが、これは『古今秘抄』の独自の本説と一致する。あまり一般的ではなかった古今注が、物語草子の世界の形成にかかわっていた証左といえる。

第四章「浄土宗談義本と中世文芸」では、浄土宗鎮西流白旗派第八祖西善聖聰の『当麻曼陀羅疏』『厭穢欣淨集』に見られる、説話生成とその意義、影響等について考察する。『当麻曼陀羅疏』には『発心集』と重なる説話があるが、それは書承による影響ではなく、浄土宗の談義の場において、他の資料と組み合わせながら新たな説話が形成されていく様相を示すものである。『宸翰英華』の後奈良天皇筆法文聞書断簡は、『宝物集』卷五の五戒に関する談義の内容のよう、それは浄土宗僧によって語られた可能性を検討する。聖聰の『厭穢欣淨集』は、『往生要集』に倣って「厭離穢土欣求淨土」を説きながら經典や説話を引く内容だが、ここに『宝物集』が利用される。後奈良天皇のもとには、浄土僧が頻繁に出入りしていることから、知恩院か知恩寺の僧により『厭穢欣淨集』が法談に用いられた可能性もあると指摘する。

第五章「天台宗法華直談と中世文芸」では、新出資料である日光輪王寺蔵『直談因縁集』の性格、説話集とのかかわり、中世物語や語り物文芸との影響関係を述べる。なお、この四百余話を収める資料は、別に解説を付して出版される予定である。『直談因縁集』の「善知識」に記される、二人の親友が桜の散るのを見て無常を感じ、一人は死に、一人は出家する説話は、『西行物語』の翻案によるお伽草子の『朽木桜』と同話関係にある。これは成立年代からいって、『朽木桜』が天台法華直談・談義の場で用いられ、新たな説話として生成し、『直談因縁集』にとどめられたことが明らかである。また、「薬王品」の鷲にさらわれた子どもが人に養われ、後に実の親と再会する説話は、『七大寺巡礼私記』等の良弁僧正説話と重なってくる。このように直談や談義の場が、説話や物語の形成にかかわってくる空間としての機能を持っていたことが知られるとする。『直談因縁集』には、『沙石集』と同話の説話が多く見られるが、これは直談や談義の話材として組織的に吸収した結果と考えられる。中世の寺院においては、資料も残されているように、各種の説話集が利用され、抜書本の作成もされていた。『沙石集』のほかにも『三国伝記』との関連もあるが、ただこれらの説話集を直接引用するのではなく、いずれも変容した姿であるのは、直談などの場で語られ、新たな説話として生成されたことを示している。このほか、『直談因縁集』の「あみだの本地」「愚癡鏡」の説話と、『法華經直談鈔』『三国伝記』等との複雑に関連する説話は、単純に成立の先後関係によるとはいえない、天台法華直談に基づき、語られることによって流傳する土壤の存在があったことを明らかにする。

第六章「西行伝承の形成と展開」は、『西行物語』の本文成立の方法と、西行を例にして、さまざまな人物と遭遇

するという形式の説話が、中世文芸のあらゆる領域に見られる物語の系譜につながることを考察する。各種の伝本の存する『西行物語』は、広本系から略本系へと成立したことは今日一般に認められているが、それはたんに本文が省略されるだけではなく、改変に際してはさまざまな外部資料が用いられたとし、その独自本文のあり方を解説していく。西行が東海道を下る途次、足柄山の場面で「白霧山深鳥一声云々」とする一節が挿入される。これは『和漢朗詠集』や『江談抄』に見られる橋直幹の詩だが、ただこれは石山での作とし、足柄山とは関係がない。ところが、釈信教の『和漢朗詠集私注』や永済注では足柄山での作とし、片仮名本系『曾我物語』でも同じ説が吸収される。『西行物語』の略本系作成において、朗詠注を直接用いたというのではなく、『曾我物語』などとも共通する依拠資料が当時流布していたのである。このほか、武藏野で元郁芳門院の侍と出会う説話、伊勢太神宮の記述の問題など、『当麻曼陀羅疏』『神道集』『撰集抄』等の作品を援用しながら略本化に用いた資料の存在を確実にしていく。

論文審査の結果の要旨

説話文学は長い研究の歴史を持ちながらも、近年のめざましい資料の発掘、説話文学の概念の広がり、研究者の説話への関心、研究者人口の増大と、その活況には隔世の感がある。新しい説話集の出現はもちろんのこと、『古今集』や『和漢朗詠集』の膨大な分量の古典の注釈資料、浄土宗や天台宗の談義書、さらに歴史書、仏書、神道書、絵画資料等にまで説話の要素を見いだし、鎌倉期物語、歌学書、軍記、謡曲、お伽草子の成立基盤にそれらを照射して複雑にもつれた糸をほぐすように、相互の関連を解説していくとする。そこには、現存しないものの底流する大きな説話群が存在し、あらゆる文芸ジャンルに影を投げかけていることが明らかになりつつあるのが今日の研究状況であろう。そのためには、各時代の作品に注意を向け、たえず新しい資料の発見と解説とを継続する必要がある。申請者は、共同研究による成果の『続古事談注解』(1995年刊、和泉書院)があり、近く新資料の『直談因縁集』の本文と研究も共編によって出版する予定のようで、若手の説話文学研究者として高い評価を得ている。

本論文の特色は、説話の意味を絶えず問い合わせながら、中世文学のさまざまな作品の背景に沈潜する説話的な要素を剔除し、一つ一つの文学史に占める位置づけをしようとするところにある。資料の博覧によって『古今秘抄』を見いだし、従来は研究の対象としてはほとんど取り上げられることのなかった浄土宗談義書の意義を確認するとともに、直談や談義の場での説話生成や改変の様相を明らかにした点など、大きな功績といえよう。物語や説話文学などの成立には、各種の先行文芸の影響を受けながらも、その出現には複雑な過程があり、それが相互にどのように関連しあうのか、説話文学研究には豊富な知識と柔軟な構想力が要求されてくる。藤原定家作かとされる『松浦宮物語』において、華陽公主が自らの転生の場として長谷寺を指定して「水晶の玉」を弁少将に授けるが、台座上の月輪中の梵字が変じて如意宝珠となり、さらに吉祥天女の姿になるという説話を解釈に用いる。長谷寺観音の南側には護摩の祈りの折に吉祥天女が置かれ、しかも手には宝珠を持つ姿だけに、この結びつきはかなり可能性が認められるであろう。弁少将が、阿修羅の化身である宇文会と戦う場面において、軍勢を二手に分けて挟み撃ちにするとともに、住吉の神などの加護によって九人の神兵が出現して撃退する構想は、吉備大臣が野馬台詩を読まされるという窮地に陥った時、長谷寺観音と住吉明神が難題を解いて救ったことや、『続日本記』に見られる、恵美押勝を討伐した真備の戦法が背景にあったとする。弁少将は、『宇津保物語』の俊蔭との関連で言及されてきたが、吉備真備がモデルであるとなると、これまでとは異なった物語の読みが可能になってくる。説話との関連を説くための、やや強引な結びつけのきらいが見られなくもないが、その論証の手続きとして多様な資料と解釈を交えての見解は説得力もあり、定家と漢籍の教養の指摘など有益な点も多い。

本論では、『咸陽宮』や『不老不死』の奈良絵本だけではなく、数多くのお伽草子類を資料として用いていく。『咸陽宮』について言えば、一つの物語が成立した後に、現存する伝本の数だけ異本が生じ、それぞれが多様な独自の世界を形成している実態を明らかにする。燕の太子丹が秦国からのがれ、荊軻と秦舞陽を刺客として差し遣わすものの、結果として失敗し燕は滅ぼされてしまうという筋道は共通しながら、その間の説話の利用は伝本によってかなり異なってくる。他の説話資料との関連もさることながら、どうしてそのような現象が生じるのか、奈良絵本の中でも異本の多さは希有な例だけに、そのあたりは語りの場との関連を含めてさらに考察のほししいところである。それはともかく、

漢籍や仏典などの資料を駆使し、中世における教養としての知識や、説話の伝流について、文芸作品との関連とともに、お伽草子の成立する背景を説いているのは読みの確かさを示すものであろう。

申請者が説話研究において重要視する資料に、浄土宗や天台宗の談義書が存するが、僧たちが直談や談義の場において説話資料を利用し、また改変していく様相がこれによって明らかにされてきた。とりわけ中世における浄土宗の談義書は研究成果も乏しく、今後も資料の出現する可能性があろう。そのような中にあって、後奈良天皇の法文聞書の断簡資料から、浄土宗の僧が談義において『宝物集』を取り込んだ『厭穢欣淨集』を利用したと考えられること、『当麻曼陀羅疏』には『発心集』が吸收されながら、さらに他の資料と組み合わせることによって新たな展開をはかっていることなど、ささやかながら一つの道筋がてきたように思う。天台宗の新資料である『直談因縁集』にしても、説話資料を用いながらも、談義の場において周辺の文芸とかかわりながら生成していく指摘は興味深い。

全体として説話文学の諸作品から、鎌倉や室町期の物語、『古今集』の注釈、談義書と、すこし対象が広がりすぎ、やや統一に欠けた憾みがあり、それぞれの考証についても資料の不足は否定しきれない面も残る。ただ、資料の発掘と解読を基本におきながら、意欲的に中世の説話文学を開拓し、数々の新見の提言は貴重である。さらにこのような研究方法をおし進め、説話文学の体系化をはかっていくことを期待したい。このような次第で本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位請求論文として充分にふさわしい価値のあることを認定するものである。